

〈特集 いま「協同」を問う '94全国集会にむけて〉

文化の、地域づくりと仕事おこし。その公共性の創造。

それはメービウスの帯だった

荒木 昭夫 (東京都/日本児童・青少年演劇劇団協議会事務局長)

来るべき全国集会、「いま『協同』を問う'94全国集会」の主題が、「人と地域に役立つ、新しい働き方と協同の仕事おこし」となったのですから、私たち文化活動関係者の論ずべき主題は、

①「文化の地域づくり」 ②「文化の仕事おこし」 ③「文化。その公共性の創造」となるのでしょうか。では。

1. 文化の地域づくり

「ものの時代からこころの時代へ」と言われたしてから、はや何年にもなりました。

私たち文化活動に関係する者たちは、そのうんと以前から、いえ、あの戦後のすぐから、それはずっと言い続けて来ていた主題でした。「ものではなくても、こころの時代…」とさえ言い続け、今日の時代を待ち望んで来ていたものでした。

さまざまな文化運動が展開されて来ていました。それは社会の、従って主として経済の動向に大きく影響されて、変化して来ていました。

その文化の活動が、間違いなく今、この「現代」をつかもうとしています。その姿をみることができるのは、「地域づくり」に力を発揮しようとしている活動でしょう。数々の事例がその姿をあぶり出してきています。例えばその一つを現代演劇を鑑賞する組織の場合で見てください。

演劇鑑賞団体の全国連絡会議が結成されたのは1962年でしたから、既に32年経ちます。その時会員は75,000人。「労演」が誕生したのが戦後すぐの1948年ですから、このときで14年の前史があり、それらを重ねて、すでに46年という経験をもつことになりました。1965年には「20万労演」を目標に掲げ、永い間の苦闘はありましたが、87年にそれは達成。その7年後の今は278,000人を数えるといいます。その力は「会員制の確立」でした。つまり「サークル総参加」。人と人とのつながりがその力の秘密だったといえるでしょう。そ

してその人とは、その地域に暮らす人たちなのでした。

「子ども劇場運動」ではいま、年間5,000回の鑑賞例会が行われています。が、その外に「地域公演」と呼んで、通常の例会という形ではなく、地域地域の要望に基づいて、ほぼ200人規模の、特に幼児を集めた鑑賞機会が作られています。ということはそこに親子が集うことになり、地域への広がりが展望されます。その活動にその地元の自治体がかみ合っているものが「地域祭典」と言っているものでしょう。鹿児島県子ども芸術祭典、四万十川子ども演劇祭、新潟親子劇場雪んこ祭り、子ども演劇祭IN吹田・岸和田…。事例は各地に広がっています。

例えば93年度に道内45こども劇場と7創造団体とで実施した北海道こども舞台祭典第1年度は集約して以下のようになりました。

70市町村、212回公演、有料入場者46,542人。入場料収入32,578,700円。市町村から拠出された補助金総計は4,000,000円。道教委他からの助成金は1,500,000円。企業などの協賛金が1,820,000円。

全体で41,700,000円の収支でした。幾つかの町村では人口比、10～14%の入場で町ぐるみの集いであったといえます。3年続けるとしています。つまりこれは、文化の仕事おこしでもありました。

2. 文化の仕事おこし

日本児童・青少年演劇劇団協議会（略称・児演協）は、子どもたちのために劇をすることを職業とする劇団の協議会で、来年（95年）は設立して20年。20周年記念事業は、東京渋谷地区の劇場施設、12会場を借り上げて「95夏 子どもたち 未来——児童・青少年演劇フェスティバル——70劇団一挙上演」と企画しました。

児演協加盟の劇団は94年6月現在、77劇団が加

盟。年間の公演回数は26,600回。

観客総数は10,393,000人。人口の1割近く、子どもの数の二人に一人は我々の劇団の芝居を年に一度は見ているという数値なのです。

ここで働く児童・青少年演劇人は2,400人。年間2,000時間以上は働いていて、平均年収は234万円。300万円以下なら82%、国民平均だと言われた452万以下の人なら96%となってしまう低収入の世界です。

どうしてこういうことになるのでしょうか。

「演劇人は好きなことをやっているから貧乏でよい」のでしょうか。「芸術家はハングリーの方が良い作品を創るから、行政は手を出さない方がよい」のでしょうか。いいえ、それは詭弁なのです。児童協加盟劇団の全活動の半分は、学校の中で、授業の一環として行われている「演劇鑑賞教室・学校公演」活動なのですが、こうした機会があるからこそ、初めて演劇に触れることができるという子どもが殆どなのです。それが日本の現実です。本来ならそれは国の責任で行われるべきはずの仕事でした。それを日本の児童・青少年演劇人は、戦後から今日まで、営々と、粘り強く、地を這うように続けて来ていたのです。これは間違いなく公共の財ではありませんか。そうです。それはそのまま文化の公共性の創造でした。

来るべき95年夏の我々の「70劇団一挙上演」は、日本の児童・青少年演劇人たちの、この生き方、暮らし方の、そういう「僕らの姿を見てくれ」と叫ぶ私たち自信の「見本市」として企画したのでした。

3. 文化。その公共性の創造

9月26日付け夕刊読売新聞の中・高校生で作るページの「今週のひとこと」欄を紹介しましょう。高2 Y・M記者と署名のある囲み記事です。

——京都駅の改築や文化博物館の建設など、建都千二百年記念行事には多額の資金が積み込まれている。しかし前月公演された集団創作音楽劇「未知の星から」は子どもが参加した子どものための唯一のイベントだったが、公的な資金援助はなかった。このため芝居の主催者は、今でも赤字で頭

を悩ませているという。記念事業の目的は、21世紀へ向けた京都の文化づくりだ。多くの大人は「21世紀は10代が作って行くものだ」というが、今回の取材で、口先だけに過ぎないことを感じた。大人の視点に立った「子どもに与える文化」でなく、「子どもとともに創造する文化」を考えてほしい。——と。

集団創作の物語もその高校生記者の文章で紹介しましょう。——西暦3194年、未来の京都に住む子どもたちが自分たちの祖先を突き止めるため、1200年前の1994年にタイムスリップ。そこで自分たちの先祖にあたる中学生が妊娠し、産むべきか中絶すべきかという問題に巻き込まれるが、中学生は未来の子どもから命の大切さを学ぶというもの。・本番の舞台はプロ顔負けの立派なものでした。——と書いています。

事実はまさにその通りでした。国の芸術文化振興基金に助成を要望すれば、「建都1200年記念なら京都市から貰いなさい」というし、京都市関係者からは、1200年協会理事長千宗室名でパンフレット用の一文が届いただけという扱いでした。

どうしてこういうことになるのでしょうか。

「未来を創るのは子どもたち」などと口ではいいながら、結局は何も支えようとはしない「大人」たち、それが「大人たち」の文化度だということです。子どもが創る文化の意味合い、その価値の意味に気付かない大人たち。その人たちの行政思想を許している国民と京都市民の文化度にも責任は及ぶでしょう。このことについて、私たち児童・青少年演劇人は心からの怒りを禁じ得ません。こんな事態を産んでいる事実こそ日本政治のスキヤングルというべきでありましょう。

文化の地域づくりは文化の仕事を起こして来ました。文化の仕事起こしは、文化の公共性を創造して来ました。文化の公共性は、そのまま、また文化の地域づくりへとつながるのです。

それはまるでメービウスの帯のように、またもとのところにつながって行くのでありました。そもそも創造活動というものが、実は人間その物を発達せしめる決め手の行為であるからでした。